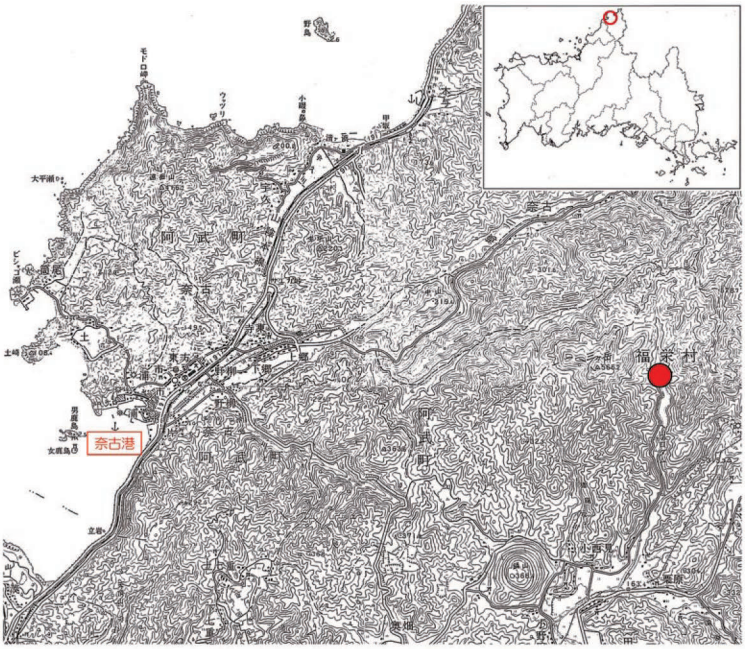
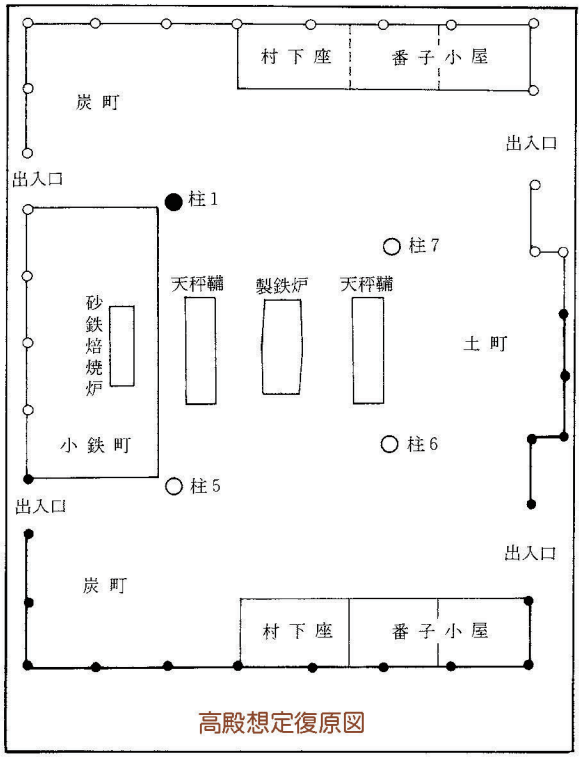
大板山たたら製鉄遺跡［国史跡］　萩市紫福





高殿想定復原図

たたら製鉄

たたら製鉄とは　木炭を燃やして原料となる砂鉄を加熱し、鉄をつくる日本の伝統的な製鉄方法で、江戸時代に日本独特の製鉄技術として完成しました。砂鉄をとかす炉に火力を強めるための空気を送りこむ「鞴」が、「たたら」と呼ばれていたためにつけられた名前といわれています。

鉄をつくる施設　たたら製鉄の中心となる建物が高殿（炉をそなえた作業施設）で、製鉄炉、鞴、砂鉄や炭などの材料置場、職人の休憩所などが置かれていました。高殿のまわりには、砂鉄を水洗いして不純物を取り除く砂鉄掛取（洗）場、できた鉄のかたまりを冷やす鉄池などがありました。

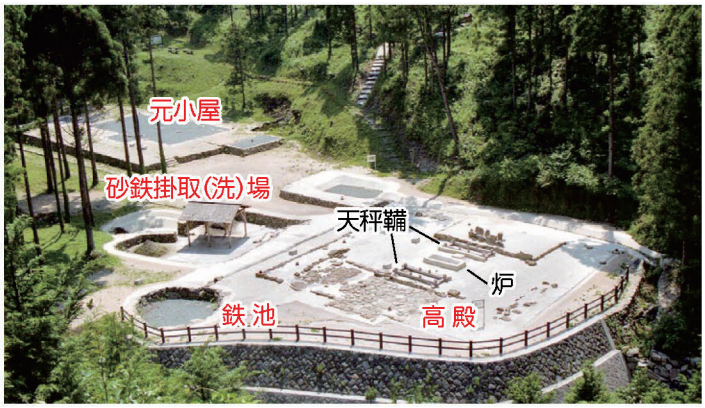
また、できた鉄のかたまりから鉄の道具の素材をつくる大鍛冶場、事務所にあたる元小屋、職人等の住宅である下小屋などもありました。これらの施設のまとまりを山内と呼び、各施設で様々な工程を経て鉄がつくられました。

洋式軍艦の建造

萩市中心部から東方の内陸部にある、山口県最大級のたたら製鉄遺跡です。わが国の近世の製鉄業のようすを理解するうえで大変貴重なことから、2015（平成27）年に「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつとして「世界文化遺産」に登録されました。

ここがポイント　幕末（江戸時代のおわりころ）には、洋式軍艦建造に欠かせない鉄（船釘）の供給を行い、1857（安政3）年に建造された長州（萩）藩初の洋式軍艦「丙辰丸」の船材となりました。西洋の製鉄技術が入ってくる前に日本の伝統技術が利用され、近代化の道のりがはかられたことになります。原料となる砂鉄の運び入れや製品の運び出しは、奈古浦（現在の奈古港）で行われました。

発掘調査

製鉄施設と道具　1990(平成2)年からの5年間の発掘調査で、高殿、砂鉄掛取（洗）場、鉄池、元小屋、下小屋などの山内施設が確認されました。また、鉤湯はね、釜茹熊手、鉄鉤や灰熊手などのたたら製鉄に使う道具、鉄釘や和鋏などの鉄製品、職人たちが使った食器などが見つかりました。

◆アクセス
　ＪＲ東萩駅から車で30分
　「紫福市」バス停から徒歩約50分